

調査団も対馬海域へ

百間港で盛大な見送り

水俣病の影響で漁場を失なった不知火海沿岸漁民は苦況打開のため対馬海域のイカ釣り漁へ転換、好成績をあげているが、十日には水俣協調査団が県水試の調査船球磨丸（八斗）で現地向った。

こんど行ったのは水俣協の宮下優さん（同市湯盛）ら四人と葦北郡津奈木村福山義人さんら四人、それに県水試浦田技師の一行九人。同日午後五時半松田水俣協長はじめ深水、長野両県議や関係

者約百人の見送りを受けて百間港をたつていった。同調査団は長崎県対馬支庁に協力を要請するとともに同海域での寒イカ漁の調査を行なうほかのべ縄と網漁の状況調査を行

なう。

なお水俣協だけは現地船をチャーターしてイカ漁の実習にあたり、結果を見てできれば明年二月ごろ船団を組んで第一陣を同海域へ送り込む予定だが、現地民の受け入れ態勢や漁場の根拠地などについても詳しく調査する。

また地元県議らは十二日午後陸路対馬に向い、厳原市で海路組を待ち十三日現地で合流のうえ同調査に協力することになっている。

現在不知火海沿岸漁民六十一隻が対馬でイカ漁に従事しているが、このほど同海域から帰った県水試牛深分場の金森技師の話では同漁は非常に有望だといっている。